

乳幼児期の発達と保育の「質」

教育心理学コース 高辻千恵

Quality of Child Care and Its Effects on Child Development

Chie TAKATSUJI

The aim of this study is to investigate various effects of center-based child care experiences on the individual development. Especially the quality of care is discussed because empirical research on what and how the quality of child care affects the child development is expected to be conducted. In most studies the quality is defined as a relationship between children and caregivers. Some structural factors and socio-cultural backgrounds are also important in considering about the quality of care.

目次

- 1 はじめに
- 2 乳幼児期の保育経験が子どもの発達に及ぼす影響
 - A 母子のアタッチメントと保育
 - B 社会的発達・認知的発達と保育
- 3 保育の「質」の定義と諸要因
 - A 保育者と子どもの関係及び保育者のあり方
 - B 保育の条件・環境と社会文化的背景
- 4 今後の課題

1 はじめに

近年、母親の就労の拡大に伴い、保育サービスの需要は増大・多様化している。保育所への入所待機問題の改善(特に低年齢児受け入れの拡大)に加え、早朝・夜間の延長保育、一時保育、休日保育といった役割が求められ、1999年に策定された「少子化対策推進基本方針」(新エンゼルプラン)では、これらに対応すべく2004年度までの具体的な目標値があげられている。また、定員の弾力化や保育所設置主体の制限撤廃等の規制緩和が推進され、民間企業の参入や自治体によるより緩やかな保育所設置基準の設定等の動きも急速に進められてきた。

しかし、このような動きに対し、保育の「質」の確保・維持を懸念する声もある(小林, 2003)。汐見(2003)は、「急速化する保育システム変更の動きのなかで、問われるべきは、子どもたち一人一人の育ちの豊かさを支える保育の質の担保の問題である」とし、子どもの育

ちと保育の「質」の関連に焦点を当てた調査とデータ提示の必要性を指摘している。また、2002年から保育所での第三者評価事業が開始され、保育の現場だけでなく保育サービスの利用者である親にとっても、保育の「質」及びその向上は今後さらに高い関心を集めるものと考えられる。

一方、欧米では、保育と子どもの発達との関連についての研究がおよそ20年間にわたり蓄積されていく中で、保育の「質」の重要性が取り上げられるようになってきた。初期の研究ではアタッチメント理論を中心に保育効果の是非に関して議論が展開されていたが、統一された見解には至らなかった。そこで、保育経験の有無や保育の開始時期及び一日の保育時間といった「量」だけではなく、保育を受けている子どもがそこでのどのように過ごすかという「質」が子どもの(特に心理的な側面での)発達に大きく影響していることが指摘されるようになったのである。

欧米におけるこうした一連の保育効果研究の中でも、近年特に注目されているのが、アメリカの国立小児保健・人間発達研究所(National Institute of Child Health and Human Development: 以下 NICHD)の研究チーム(NICHD 乳幼児保育研究ネットワーク)が実施している大規模な縦断研究である。この研究は、保育が子どもの発達に及ぼす影響について包括的に調査・検討することを目的に、全米24の病院で1991年に生まれた子ども1364名及びその家族を対象とし、その後の長期的な追跡調査によるデータをもとに、現在も進められている。調査対象には、社会経済的背景・人種・家族構成・母親の学歴などについて非常に多様な家庭が採用

された。また、親・保育者・訓練を受けた観察者がアセスメントや評定を行い、保育の特徴(子ども対大人の比率・グループの大きさ・質・時間・開始年齢・ある子どもが同時に、また長期間経験した異なる保育環境の数)、家族の特徴(経済状況・家族構成・母親の語彙・母親の学歴・心理的な適性・育児姿勢・母子間の相互作用の質・家庭環境の貢献の程度など)、及び子どもの特徴(性別・性格など)といった様々な情報を多角的に収集している。

こうして得られたデータについてこの数年間で多くの研究結果が報告されているが、その中で、質の高い保育が、母子関係・愛着関係の良さ、問題行動の報告の少なさ、認知・言語能力の高さ、就学レディネスの高さに関連するということが、またその逆として、質の低い保育が、母子関係・愛着関係の悪さ、問題行動の多さ、認知・言語能力の高さ、就学レディネスの低さに関連していることが示された。これにより保育効果を実証的に検討する上で「質」は不可欠な要因であることがより明確に示唆されたと言えるだろう。こうした研究結果を受けて、さらに最近では「質」についてのより精緻な定義や親の特性・家庭環境などとの関連についても研究が進められつつある。

国によって保育制度や育児についての社会・文化的な事情の相違があることは十分に考慮しなければならないが、わが国では保育へのニーズが急速に高まり多様化が進む一方で、長時間・長期間にわたる保育経験及びその「質」が子どもの発達にどのような影響を及ぼすのか、またそこにはどのような要因が関連しているのかという問題に関しては未だ十分に検討がなされているとは言えず、今後特に実証的な研究の進展が望まれる。

以上をふまえて、本稿では、保育が子どもの心理的な発達に及ぼす影響に関する欧米を中心とした実証研究において、これまでに得られた知見及び指摘されている問題、保育の「質」との関連について概観する。その上で、保育の「質」の定義について、先行研究をもとに主に提唱されている観点や問題点を整理し、今後の課題について考察を加える。なお、ここでは保育の「質」を特に子どもの発達を保障・援助する上で必要な保育のあり方と捉えるものとする。

2 乳幼児期の保育経験が子どもの発達に及ぼす影響

A 母子のアタッチメントと保育

保育、あるいはそれに先立つ母親の就労が子どもの

発達に及ぼす影響について、特に問題とされたのは、母子のアタッチメント形成である。

アタッチメントとは、広義には、個体が特定の対象との間に形成する強い情緒的絆、あるいは愛情関係一般を指す(遠藤, 1997)。発達初期のアタッチメントは内在化され、その後の社会情緒的発達の基盤となる自己や他者についてのイメージ(内的ワーキングモデル)を構成すると考えられている。

アタッチメント理論を提唱したボウルビイは、発達早期に愛情のこもった一貫したかかわり、すなわち母性的養育を経験することにより、特定の人物との間で安定したアタッチメントを形成することが、個人の健全な身体的・心理社会的発達に不可欠であるとし、母性的養育を担う存在としての母親と子どもの関係を重視した。また、彼は、母性的養育を欠いている状態を「母性剥奪(maternal deprivation)」と呼び、早期の母子分離は乳幼児期の発達(特に対人関係能力)にその後の回復が困難な悪影響をもたらすと主張した(Bowlby, 1951)。

こうした「発達早期においては、母親が一貫して養育にあたるべきであり、母親との分離は最小限にすべき」というボウルビイの初期の考え方や、スピッツらによるホスピタリズム(病院・乳児院等の施設ケアによる乳児への悪影響)研究をうけて、母親の不在・分離を意味する母親の就労や子どもを保育園という「施設」に預けることの悪影響が懸念され、主に1970年代以降、発達早期の保育経験が母子のアタッチメント形成を阻害するか否かをめぐり、活発な論争が展開されるとともに(Rutter, 1972)、保育効果に関する多くの実証研究が行われることとなったのである。

1970年～80年代の早期の研究では、乳児期からの保育の開始は不安定(insecure)なアタッチメントの形成につながるという見解が多く示されていた(Lamb, Sternberg, & Prodromides, 1992)。Belsky(1988)は4つの研究成果をレビューし、生後約12ヶ月の時点でストレンジ・シチュエーション法(strange situation procedure: SSP)により実験的に測定した母子のアタッチメントのタイプを比較した場合、フルタイム就労の母親の乳児は、パートタイム就労の母親及び就労していない母親の乳児に比べ、不安定な愛着関係(特に回避型)を示す傾向がある(フルタイム群41%・就労していない群26%)ことを示している。彼はさらに、乳児期のこうした不安定なアタッチメントは幼児期・児童期の攻撃性・反抗・その他の問題行動といった行動パターンをもたらすものであると述べ、1歳未満のフルタイ

ムの保育所保育は、子どもの社会情緒的発達においてリスクであると主張した。

しかし、これに対して Clarke-Stewart(1989)は、アタッチメントの測定法として SSP を用いた17研究すべてを概観し、回避型のアタッチメントについてはフルタイム就労の母親は、専業主婦の母親の8%多いだけであると反論した。彼は、母親が就労している子どもは日常的に母子分離を経験していることから、母子分離と再会場面における反応をもとにアタッチメントを測定しようとする SSP の手続きは妥当でないとも指摘している。つまり、保育経験群で回避型のアタッチメントとされた子どもたちの多くは、実験場面では実際よりも低いレベルのストレスしか受けていないために、愛着行動が活性化されなかったという解釈を呈示したのである。

保育と母子のアタッチメントに関する研究の問題点としては、他にも、保育を経験している子どもとそうでない子どもそれぞれが行動として示す不安定型のアタッチメントの持つ意味が、果たして質的に同じものと言えるのか、未だ明らかにされていないこともあげられる。母子関係を取り巻く状況が異なる以上、それに対して適応的とされる愛着行動や相互作用のあり方にも相違はありうると考えられる。Pierrehumbert et al.(1996)は、不安定なアタッチメント群における親以外の大人による保育を高い割合で受けている子どもと低い割合で受けている子どもを比較すると、前者がその後の問題行動のリスクが低いことを報告しており、同じアタッチメントのタイプに意味の違いがある可能性を示唆している。

さらに、子どもを保育に預けるという選択には、両親の価値観・必要性・状況などが反映されており、こうした家庭の特徴についても検討すべきことが指摘されている(Lamb, 1999)。特に、母親が就労している場合、そのことに対して母親がどのように捉えているかは、直接的に母子のアタッチメントに影響を及ぼしうる大きな要因と言えるだろう。Stifer et al.(1993)は、出産後の社会復帰が早く、子どもと離れていることに強い不安を感じる母親は、アタッチメントが不安定になりやすいとしている。また、近年、保育が子どもに及ぼす悪影響を報告する研究は減少しているとされるが、その一因として、子どもを保育に預けることに対する親の不安や罪悪感が減少してきていることがあげられている(Pierrehumbert, 2002)。

NICHD Early Child Care Research Network(1997)によると、

- ・保育経験の有無によって、生後15ヵ月時の SSP の分離場面における苦痛の表出や愛着パターンに有意な差は見られない。
- ・アタッチメントの安定性および回避得点に関連しているのは、保育経験の様々な側面(質・量・入園時期など)ではなく、母親の敏感性と応答性であった。
- ・母親の敏感性及び応答性が低く、かつ保育の質が低く、限度を超える長時間保育を継続しており、複数の保育(二重保育)を受けているような場合は、安定したアタッチメントが形成されにくい。

という結果が報告されている。

これらを総合すると、1980年代以降の母親の就労及び保育と母子のアタッチメントに関する研究結果は、就労や保育自体がアタッチメントの発達に影響するのではなく、就労や保育に関連した母親・子ども・家庭環境・保育それぞれにおける多様な要因が複雑に絡み合っただけで母子のアタッチメントに影響することを示唆していると言える。ただし、保育経験の異なる母子のアタッチメントのタイプに見られる発達の・質的な差異や、SSP を利用することの妥当性やその他の測度の開発・改善については、より詳細に検討されるべきであろう。

さらに、保育者を二次的な養育者として捉え、母子のアタッチメントのみならず、保育者と子どものアタッチメントが子どもの社会情緒的発達と適応に及ぼす影響についても、特に90年代以降の研究では高い関心が寄せられている(e. g., Howes & Hamilton, 1992)。保育者と子どものアタッチメント及びその形成に関連する保育者の特性については、これ自体が保育の「質」の中核とも言えるものであり、今後縦断的な調査も含めたより精緻な研究の進展が期待される。

B 社会的発達・認知的発達と保育

1980年代に報告された保育と子どもの社会的な発達に関する主な研究では、乳児期に保育を受けた子どもはそうでない子どもに比べて、時間の経過とともに減少はするものの、友達に対して攻撃的な傾向が見られ、また両親に対して従順でないというようなネガティブな影響を示した結果が得られている(e. g., Haskins, 1985)。しかし、これらとほぼ同数の研究がこうした差異は認められないことを示しているという指摘もある(Clarke-Stewart, 1989)。

その後現在に至るまで、子どもの対人行動や社会性、問題行動を対象とする研究の蓄積はされているものの、研究ごとの結果はまちまちであり、統一された知見は

得られていない。こうした見解の不一致については、多くの研究で調査の対象となっている子どもの人数が少なく、あるいはサンプルとして抽出されてきた子どもが実際にその社会においてどれだけ代表性を持っているかという点で疑問が残るといふ研究方法上の問題の他に、家庭環境(家庭の社会・経済的状況や両親の就労形態などの条件)や対象となる子ども自身の初期の内的な状態(気質や出生時のハンディなど)のような保育以外の様々な要因の影響も原因としてあげられている(e. g., Volling & Feagans, 1995)。

一方で、研究結果の蓄積に伴い、1990年代以降の多くの研究においては、保育の「質」が最も影響力のある変数であることが主張されてきた(e. g., Howes, Hamilton, & Matheson, 1994)。Field(1991)は、5～8歳児28名(データⅠ)、及び6年生56名(データⅡ)を対象に、安定した質の高い保育経験と就学後の行動や成績との関連を2つの縦断研究データより検討しているが、その結果、データⅠにおいては、質の高い保育を経験した群で、保育時間の長さや親評定によるリーダーシップや友だちからの人気との間に正の相関が、攻撃性との間に負の相関が示され、データⅡでは、質の高い保育をより長時間受けた子どもは仲間との相互作用においてより身体的な接触を示し、与えられたプログラムによりよく従事し、さらに数学の成績がより良いという結果が得られている。また、Hausfather et al.(1997)では、4～5歳児155名について、質の高い保育を受ける時間が長いほど行動評定においてポジティブな影響(興味を持った参加の増大)、質の低い保育を受ける時間が長いほどネガティブな影響(攻撃的防御の増大)が見られ、さらに家庭環境はそれぞれの影響を拡大する効果があることが示されている。

また、近年の研究の多くが早期の保育経験と問題行動との関連はほとんど、もしくは全くないと結論づけている(e. g., Caruso & Corsini, 1994)。NICHDによる研究結果でも、総合的に見て、保育の質・量・安定性・種類・開始時期といった変数は、子どもの問題についてごくわずかな関連しか見いだせないとされている。ただし、「問題行動」として扱われている反社会的な子どもの行動については、仲間との関係の悪さや友達に対する攻撃行動、大人に対する非従順な態度といった異質なものが混ざっているという指摘(Lamb, 1998)に加え、大人に対する攻撃性・反抗は子どもの独立や自立、あるいは主張性が反映されたものとしてポジティブに捉えられうるのか否かという問題(Clark e-Stewart, 1989)もあり、これらをふまえてより詳細

に再検討した上で、同年代の友だちとの遊びや大人の指導のもとで行われる集団での活動といった保育における対人的・社会的な経験の内容や保育所全体の保育方針などについても考慮することが必要であると考えられる。

一方、言語・知的能力といった認知的な発達に関する保育の影響については、比較的高い水準の保育政策を持つ国々で研究が進められていることもあり、おおむね保育が認知的な能力を刺激するという考えを支持する結果が得られている(Pierrehumbert, 2002)。

この分野における研究は、教育的な目的を背景とした介入計画に基づき(特に貧困層家庭の子どもや出生時に低体重児あるいは未熟児であった子どもなど、発達のリスクの高い子どもを対象に)積極的な指導を行ってその効果を確かめているもの(e. g., Ramey, 1992)と、実験的ではなくある地域を対象に通常の保育の影響について調査を行ったものに大別される。前者においては保育が及ぼす効果はほぼポジティブとするものが全体のうちのほとんどを占めるが、後者については保育の良い影響を認める研究が比較的多いものの、保育効果はないとするものやネガティブな影響を示すものなども散見される(e. g., Vandell & Corasaniti, 1990)。こうした結果の相違については、保育の質の違いや家庭環境との交互作用によるものである可能性が指摘されている。

Andersson(1992)は、スウェーデンの子どもを対象に8歳時・13歳時に追跡調査を実施し、質の高い保育は子どもの知的な発達にも明らかにポジティブな効果をもたらすだけでなく(e. g., Field, 1991)、就学後の学業成績にもポジティブな長期的影響を及ぼすと結論づけている。また、家庭が貧困であるため家で知的な刺激に触れる機会が少ない(すなわち家庭における知的発達の促進が期待されにくい)子どもの場合に特に保育の効果が大きいこと(Caughy, DiPietro, & Strobino, 1994)も複数の研究により示された。一方で、より複雑な影響のパターンも示されており、保育の質があまりよくない場合には、家庭で得られるよい経験や刺激に接触する機会が減らされてしまうために、家庭環境のよい子どもには保育経験がネガティブに働く恐れがあることも示唆されている。Desai, Chase-Lansdale, & Michael(1989)は、言語獲得に関して、早期の保育は社会経済的状況の低い家庭の子どもにはポジティブな影響を及ぼすが、高い家庭の子どもにはネガティブな影響を及ぼすという知見を示している。認知発達の領域に関しては、保育の質を高めるだけでな

く、特に調査対象となる子どもの家庭環境をふまえた上で、子どもの個人差に即した指導プログラムを検討する必要性があると考えられる。

3 保育の「質」の定義と諸要因

A 保育者と子どもの関係と保育者の関わり方

保育の「質」をどういうものとして捉えるのか、その定義や「質」を示すものとして扱われている変数の内容は研究によって異なり、一義的に述べることは難しい。そもそも、特に「質」に関わる側面は、社会や文化の持つ子どもや子育てに対する価値観によるところが大きいため、普遍的・一義的な定義よりも各々の実情に即した概念が求められるとも言える。しかし、主に子どもの心理的発達に関する研究の文脈においては、保育の「質」の重要性を指摘する研究の多さに反して、「質」の定義そのものを詳細に吟味したものは未だ少ない。

わが国において保育の「質」に焦点をあてて精緻な検討を加えた研究としては、金田・諏訪・土方(2000)があげられる。この中で、「保育の質」を捉える指標は、保育実践の質を直接規定する程度によって6層に区分された構成要因を示す立体的な概念図で表されている。この概念図において特徴的なのは、「子どもと保育者の関係」を頂点に置き、それに最も近い最上層(第六層)に「保育者のあり方」を位置づけた上で、「保育者の意識」が全体の中軸に貫かれている点である。すなわち、「保育者の質」こそが「保育の質」の定義の最も中核をなすと捉えられており、以下、第五層に「保育目標・内容」、第四層に「保育方法・形態」、第三層に「保育体制」、第二層に「保育の外部システム」、そして底辺部にあたる第一の層に「社会・文化システム」という形で概念図が構成されている。これらの要因は相互に関連しあい影響しあっているとされているが、上層の要因から下層の要因へと一方向的に機能・作用するものではなく、また各要因に含まれる具体的な要素間の関連もあるとされている。

先に「質」について研究間で一致した定義づけは難しいことを述べたが、この金田ら(2000)で作成された概念図でも、特に「子どもと保育者の関係」「保育者のあり方・意識」が重視されているように、保育のこうした側面を「質」の定義の中核に据えるという点は、国内外を問わずほとんどの研究で共通していると言える。

Melhuish & Moss(1991)は、アメリカ・フランス・スウェーデン・イギリスの四カ国における保育研究を総括し、保育の「質」が子どもの発達に影響力を持つ重

要性をひとつの結論とした上で、その定義について、「子どもの発達と福祉をもたらす子どもの経験」と述べている。彼らは子どもの発達可能性を引き出すものは子どもの経験の多様性であるとし、そこに含まれる保育者と子どもの相互作用、すなわち保育者が「子どものコミュニケーションに対して適切に反応すること」を最も基本的な要素として特に重視している。

NICHDによる一連の研究においても、保育の「質」は、保育者の子どもに対する敏感な関わり方を測定・評価することにより捉えられている。具体的には、観察の対象となる行動(ORCE 行動測定尺度)として、

- ・積極的情動の共有
- ・積極的なスキンシップ
- ・発声や子どもの話に答える
- ・子どもへ積極的に話しかける
- ・認知的発達の刺激・学習能力を身につけさせる
- ・お互いに交流のやり取りをする

他(計12項目)

といった内容があげられている。

このように、子どもが保育者との間に安定した情緒的關係、すなわちアタッチメントを形成しうるか否かは、子どもの社会情緒的発達の1つの表れであるとともに、保育の「質」の非常に本質的な指標とも言える。

Howes(1999)は、複数の養育者に対するアタッチメントの組織化について、母親による一貫した養育の影響の大きさの順に、「モノトロピー」「階層的組織化モデル」「統合的組織化モデル」「独立的組織化モデル」の4モデルを提案している。これまでの先行研究では、保育者へのアタッチメントは、母親に対するものとは独立して、保育者との相互作用経験の質に基づいて形成されることが示唆されてきている(e. g., Goossens & van Ijzendoorn, 1990; Howes & Hamilton, 1992; Howes, Galinsky, & Kontos, 1998)。わが国においても、保育所における縦断的観察を通して、母親との愛着関係が不安定な乳児が保育者との間に愛着関係を形成し、徐々にそれが安定していく過程が報告されている(上田, 2003)。さらに、母親の場合と同様に、保育者からの敏感で応答的な関わりが安定したアタッチメントの形成に重要な役割を果たすこと(Anderson, Bagel, & Smith, 1981)、また保育者への安定したアタッチメントが円滑な仲間関係の構築に関連して子どもの社会的適応を支え、子どもの社会情緒的発達を促進すること(安治, 1997)も、実証的に示されている。

こうした先行研究の結果からも、保育者は子どもにとって母親とは別個の独立した愛着対象となりうる存在で

あり、それが安定したものとなるには保育者による関わりが重要であることが示唆されていると言えるだろう。さらにこれらを保育の「質」の中核として捉えるとき、子どもと母親のアタッチメントも改善されるという可能性(鯨岡, 1986)や、構造的な側面も含め安定した関係性を支える多様な要因との関連など、保育者と子どものアタッチメントの持つ意義により焦点をあてた研究が進められるべきと考えられる。

B 保育の物理的・制度的環境と社会文化的背景

Pierrehumbert(2002)は、先行研究をレビューし、保育の「質」は大きく構造的要因と機能的要因の二つに分けられるとした。前者は保育者と子どもの比率・設備(家具やおもちゃ)・保育者のトレーニング・雇用の安定性と安全性といった比較的統制可能な物理的・制度的側面であり、前述した金田ら(2000)の概念図と比較すると、第四・第五の「保育方法形態」「保育体制」の部分にあたるものと考えられる。一方、後者は保育者の感性・暖かさ・モチベーションといった主に保育者の資質に関する心理的側面である。こちらは同じ概念図における上層及び中軸部分に対応づけることが可能であろう。ただし、ここではこの二側面は階層的なものとしてではなく並列なものとして扱われている。

保育の「質」の構造的要因とされる物理的・制度的な側面と、多くの研究でより本質的な「質」と位置づけられている機能的要因、すなわち保育者と子どもの関係性や保育者の資質といった側面の間の関連については、相関は低いとする研究(e. g., Scarr, Eisenberg, & Deater-Deckard, 1994)がある一方で、関連が見られるという指摘(see Lamb, 1999)もあり、施設保育に関する限り研究間の見解は一致していない。

ただし、こうした2つの要因間の関連とそれが子どもの発達に及ぼす影響について、Howes, Phillips, & Whitebook(1992)は、子どもと保育者の比率といった構造的要因は、子どもと保育者のアタッチメントなどの機能的側面への影響を経て子どもの社会的コンピテンスに影響するという結果を報告している。この研究においては、2つの要因間の関連を認めた上で、構造的要因が子どもの発達に間接的な影響を及ぼすということが示唆されていると言えるだろう。

一方で、特に構造的要因そのものが直接的に子どもの発達に大きく影響するという研究はあまり見られない。しかしこれは、研究の対象となるような集団保育の場合には構造的要因に該当する変数が保育の設置基準としてあらかじめ設定されているものである場合が

多いこと、またある程度条件の悪さは機能的側面により補われていることなどが可能性として考えられ、構造的要因による影響が無いことを示すものではないと考えられる。Melhuish & Moss(1991)は構造的要因にあたる条件を、保育の「質」に影響を及ぼすものでありかつ比較的簡単に操作しうる要素として捉えている。構造的要因の直接的な影響、機能的要因と構造的要因の関係については、保育条件や環境の変化が懸念されている現在、さらに比較・検討が進められることが必要であろう。

また、金田ら(2000)の概念図において、社会文化的背景は「保育の質」の最下層に位置づけられている。保育実践との直接的な関係は薄い最も基盤となるべきものとして、その社会全体の持つ文化の影響が組み込まれているのである。こうした社会文化的背景について、Rothenthal(1999)は、保育の「質」はその文化の価値観に大きく左右されるとして、保育の「質」の研究にあたっては“culture-free”ではなく“culture-sensitive”であるべきと指摘している。これを受けて、Pierrehumbert(2002)は、culture-sensitiveな観点から、保育や子育てに関わる様々な立場(保育者・親・ケアマネジャー・政策決定者など)から捉えた保育の「質」に関するイメージを収集した上で、親と保育者の子どものケアに対する価値付けを評価しうる測度の開発を試みている。先にも述べたように、「質」に対する評価は社会文化的・時代的な価値観が反映されるものであると考えると、保育の「質」に関する測度の開発・改訂にあたっては、こうした観点についてもふまえておくことが求められると言える。

4 今後の課題

本稿では、先行研究から保育の「質」を保育者と子どもの関係を中心とした複数の側面よりなるものとして捉えてきた。今後はこれらの要因間の関連やこうした保育の「質」が子どもの発達にどのように影響していくかというプロセスを縦断的に検討し、解明していくことが必要と考えられる。

今後の課題の1つとして、子どもの保育経験が親に及ぼす影響を介してさらに間接的に子どもの発達にも影響することを考慮した上で、保育の役割を検討することがあげられる。保育あるいは就労経験が主に母親の精神的健康に影響し、その結果母子間の相互作用や子どもの発達にも影響を及ぼすということは実証的にも示されており(Benn, 1986)、実際、既に保育所は地

域の子育て支援機関としての役割も求められるようになっていく。また、アメリカでは特にシングルマザーや低所得層の家庭では、母親の就労による家庭の社会的経済的地位の向上により子どもの発達にポジティブな影響が見られるといった報告もある(Harvey, 1999)。わが国においても、各家庭、特に母親が生活様式や価値観をどのように捉え、選択していくかは、今後ますます多様化していくことが予測され、また子どもの発達にも様々な形で影響力を持つだろう。そうした中で保育がどのような役割を果たしうるのか、子どもの発達を保障するために維持・向上されるべき保育の「質」とは何かといった問題は極めて重要な意味を持つものと考えられる。

同時に、母親-子ども、保育者-子どもという形で捉えられることの多い保育において、子どもの発達への影響という観点から、保育者-母親の関係についても検討することの意義はさらに増していくと考えられる。子育てをめぐって家庭と保育者の連携の重要性が提唱される(土屋, 2002)一方で、そこで生じる葛藤や問題については、未だ十分に引き上げられてきたとは言えない。保育者と家庭の間で形成される信頼関係とは具体的にどのようなものなのか、それが親、ひいては子どもにどのような影響をもたらすのかについても、保育の「質」の問題と絡めて今後より詳細な検討を加えられることが期待される。

(指導教官 田中千穂子助教授)

引用文献

- 網野武博(主任研究者) 2001・2002 平成13・14年度厚生科学研究(子ども家庭総合研究事業)「保育が子どもの発達に及ぼす影響に関する研究」分担研究「保育効果に関する縦断的研究Ⅰ・Ⅱ」報告書
- Anderson, C. W., Bagel, P., & Smith, K. 1981 Attachment in substitute caregivers as a function of center quality and caregiver involvement. *Child Development*, 52, 53-61.
- Andersson, B. E. 1992 Effects of day care on cognitive and socioemotional competence of thirteen-year old Swedish school-children. *Child Development*, 63, 20-36.
- 安治陽子 1997 乳児期における愛着の組織化と社会的適応-漸近的組織化は可能か- 東京大学大学院教育学研究科教育心理学コース修士論文
- Belsky, J. 1988 The 'effects' of infant day care reconsidered. *Early Childhood Research Quarterly*, 3, 235-272.
- Benn, R. K. 1986 Factors promoting secure attachment relationships between employed mothers and their sons. *Child Development*, 57, 1224-1231.
- Bowlby, J. 1951 Maternal care and mental health. (『乳幼児の精神衛生』黒田実郎訳 岩崎学術出版 1967年)
- Caruso, G. A. L. & Corsini, D. A. 1994 The prevalence of behavior problems among toddlers in child care. *Early Education & Development*, 5, 27-40.
- Caughy, M. O., DiPietro, J. A., & Strobino, D. M. 1994 Day care participation as a protective factor in the cognitive development of low-income children. *Child Development*, 65, 457-471.
- Clarke-Stewart, K. A. 1989 Infant day care: Maligned or malignant? *American Psychologist*, 44, 266-273.
- Desai, S., Chase-Lansdale, P. L., & Michael, R. T. 1989 Mother or market? Effects of maternal employment on the intellectual ability of 4-year old children. *Demography*, 26, 545-561.
- 遠藤利彦 1992 愛着と表象: 愛着研究の最近の動向-内的作業モデル概念とそれをめぐる実証研究の概観. 心理学評論, 35, 201-233.
- Field, T. 1991 Quality infant day care and grade school behavior and performance. *Child Development*, 62, 863-870.
- Goossens, F. A. & van Ijzendoorn, M. H. 1990 Quality of infant attachment to professional caregivers: Relation to infant-parent attachment and day-care characteristics. *Child Development*, 61, 832-837.
- Harvey, E. 1999 short-term and long-term effects of early parental employment on children of the National Longitudinal Survey of Youth. *Developmental Psychology*, 35, 445-459.
- Haskins, R. 1985 Public school aggression among children with varying day-care experience. *Child Development*, 56, 689-703.
- Hausfather, A., Toharia, A., LaRoche, C., & Engelsmann, F. 1997 Effects of age of entry, day-care quality, and family characteristics on preschool behavior. *Journal of Psychology and Psychiatry*, 4, 441-448.
- Howes, C., Phillips, D., & Whitebook, M. 1992 L'accueil en crèche aux Etas-Unis: Les données d'une recherche. In B. Pierrehumbert (Ed.), *L'accueil du jeune enfant: Politiques et recherches dans les différents pays*. (pp. 123-132). Paris: Les Editions Sociales Francaises.
- Howes, C. & Hamilton, C. E. 1992 Children's relationship with caregivers: Mothers and child care teachers. *Child Development*, 63, 859-866.
- Howes, C., Hamilton, C. E., & Matheson, C. C. 1994 Maternal, teacher, and child care history correlates of children's relationships with peers. *Child Development*, 65, 264-273.
- Howes, C., Galinsky, E., & Kontos, S. 1998 Child care caregiver sensitivity and attachment. *Social Development*, 7, 25-36.
- Howes, C. 1999 Attachment relationships in the context of multiple caregivers. In J. Cassidy & P. Shaver (Eds.), *Handbook of attachment*. 671-687. New York: Guilford.
- 金田利子・諏訪きぬ・土方弘子 編著 2000 「保育の質」の探究 ミネルヴァ書房
- 小林紀子 2003 「保育の質」がなぜ今問題になるのか 発達24(94) 10-17.

- 鯨岡峻 1986 母子関係と間主観性の問題 心理学評論, 29, 506-529.
- Lamb, M. E. 1999 Nonparental child care. In M. E. Lamb (Ed.), *Parenting and child development in "nontraditional" families*. (pp. 39-55). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Lamb, M. E., Sternberg, K. J., & Prodromidis, M. 1992 Nonparental care and the security of infant-mother attachment: A reanalysis of the data. *Infant behavior and development*, 15, 71-83.
- Lamb, M. E. 1996 Effects of nonparental child care on child development: An update. *Canadian journal of psychiatry*, 41, 330-342.
- Melhuish, E. C. & Moss, P. (Eds) 1991 Day care for young children. International perspectives. London: Routledge. (『保育の新しい潮流 乳児保育の国際比較』川原佐公他訳 チャイルド本社 1992年)
- NICHD Early Child Care Research Network 1997 The effect of infant child care on infant-mother attachment security: Results of the NICHD study of early child care. *Child Development*, 68, 860-879.
- Pierrehumbert, B., Ramstein, T., Karmaniola, A., & Halfon, O. 1996 Childcare in the preschool years: Attachment, behavior problems and cognitive development. *European Journal of Psychology of Education*, X I, 201-214.
- Pierrehumbert, B., Ramstein, T., Karmaniola, A., Miljkovitch, R., & Halfon, O. 2002 Quality of child care in the preschool years: A comparison of the influence of home care and day care characteristics on child outcome. *International Journal of Behavioral Development*, 26, 385-396.
- Ramey, C. T. 1992 High-risk children and IQ: Altering intergenerational patterns. *Intelligence*, 16, 239-256.
- Rosenthal, M. K. 1999 Out-of-home child care research: A cultural perspective. *International Journal of Behavioral Development*, 23, 477-518
- Rutter, M. 1972 Maternal deprivation reassessed. (『母性剥奪理論の功罪』北見芳雄他訳 誠信書房 1979年)
- Scarr, S., Eisenberg, M., & Deater-Deckard, K. 1994 Measurement of quality in child care centers. *Early Childhood Research Quarterly*, 9 131-151.
- 汐見稔幸 2003 保育制度の改革と子どもの発達保障 発達 24(94) 2-9.
- Stifer, C. A., Coulehan, C. M., & Fish, M. 1993 Linking employment to attachment: The mediating effects of maternal separation anxiety and interactive behavior. *Child Development*, 64, 1451-1460.
- 上田七生 2003 乳児と保育者との愛着関係の発達および変容の過程—第一愛着対象者との愛着関係が不安定な乳児を対象に— 広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部, 51, 359-363
- Vandell, D. L. & Corasaniti, M. A. 1990 Variations in early child care: Do they predict subsequent social, emotional, and cognitive deferences? *Early Childhood Research Quarterly*, 5, 555-572.
- Volling, B. L. & Feagans, L. V. 1995 Infant day care and children's social competence. *Infant Behavior and Development*, 18, 177-188.

付記

本研究は、平成13年度および平成14年度厚生科学研究(子ども家庭総合研究事業)「保育が子どもの発達に及ぼす影響に関する研究」分担研究「保育効果に関する縦断的研究Ⅰ・Ⅱ」(主任研究者 網野武博)の補助を受けた。